京都大學經濟學會

經濟論叢

第六十四卷　第一・二・三號

京都大學經濟學部創立三十周年

記念論文集

第一集

預金通貨概念の問題……中谷　實

中國史上におけるインフレーションに就いて……穗積文雄

獨占資本主義と外國市場……松井　清

國有鐵道に於ける資本と勞働……島　恭彥

社會政策の理論と「階級鬪爭」……岸本英太郎

昭和二十四年九月

中國史上におけるインフレーションに就いて

穂積文雄

一

中國史上における貨幣の中心はなんといつても錢と鈔（紙幣）である。だから、中國史上におけるインフレーションに就いての考察はこの二者に就いてなされねばならないであろう。しかるに、インフレーションは、普通、紙幣、とくに不換紙幣においてなりたつものと考へられる。そうだとすると、錢においてインフレーションはなりたたぬことになり、したがつて、錢についてインフレーションを考察するということは意味のないことでなければならない。だが、インフレーションは、はたして、不換紙幣においてのみなりたち、鑄貨においてはなりたたぬものであろうか。おもうに、インフレーションは、通貨の流通量が増大して、財貨の存在量との均衡が破綻し、その結果、貨幣價値の下落すなはち物價の騰貴を生ずる現象であろう。それは、なるほど、不換紙幣においてなりたつが普通であろう。だが、それにしても、たとえば、金銀が非常に巨大な量において出現する場合、金銀貨において、かかる現象が見られぬものであろうか。もちろん、この場合、金銀の供給増大の結果、その價値が低落し、金銀の價値低落の結果、金銀貨の價値が低落するのである、だから、貨幣價値の下落は貨幣素材の價値の下落に起因するの

であつて、貨幣數量の增大に起因するのではない、だから、それはインフレーションではない、といえるかも知れない。しかしながら、そういうとき、それは、貨幣價値の說明において素材說(Stoffentheorie)に立脚している。そして、素材說は商品說(Warrentheorie)のカテゴリーに屬する。しかるに商品說においてながめられるとき貨幣は物品貨幣の性格を拂拭してをらぬとせねばならないであろう。かくて、いま、それにおいて物品貨幣の性格を見うるとすれば、金銀の量數の增大は、やがて、貨幣數量の增大にほかならぬと考えられよう。すくなくとも造幣特權(Münzregal)の確立せざる以前においてはそう考えることが實際に應ずるものであり、また、近世、造幣特權の確立せる後においても、自由鑄造の制度が採用されるかぎり、かく考えることは實際と背離しないといへよう。こう考えてくると、インフレーションはかならずしも紙幣とくに不換紙幣においてのみなりたつ現象ではなく、いはゆる鑄貨においてもなりたちうることをみとめてさしつかえないであろう。しかしながら、なりたちうる、といふことは一つのことであり、なりたつ、ということは他のことである。では、中國史上、錢においてインフレーションがなりたつを見ることができるか。そして、できるとすれば、それはいかになりたつか。

二

錢は方孔、圓形のいはゆるあなあき錢で、その素材からみればときに鐵を主とする鐵錢が行はれたこともあるが、まづ原則としては銅を主とする銅錢が行はれたものである。しかるに銅錢は、その素材たる銅の產出量の制約、その器具への使用、ならびに、錢そのものの國外への流出等によつて、その流通量の不足になやむこと、むしろ、普通のやうで、インフレーションどころか、逆に、デフレーションにおちいることめづらしからず、錢の缺乏

を荒年における五穀の缺乏にたとえて、「錢荒」ということばさえうまれたくらいである。[1] しからば、錢においてはインフレーションは見られぬかといえば、かならずしもそうでもない。では、いかなるところにそれが見られるか。われわれはそれがまづ私鑄を媒介としてあらはれるのを見るであろう。

錢におけるインフレーションが私鑄を媒介としてあらはれるということは一見奇怪なことと感ぜられよう。たしかに、それは奇怪な現象にちがいない。しかし、それはすこしもめづらしいことではなく、中國においては、たえずくりかえし生起するところの、むしろ、普通の現象である。元來、私鑄がインフレーションの原因として奇怪に感ぜられるのは、私鑄が、違法であり、私鑄貨は贋造貨であり、例外的存在であり、その流通量は大でない、というよりも、むしろ、微々いうにたりないところに屬し、したがつて、それは、とても、通貨の價値を低落せしめ、財貨の價値を騰貴せしめるほどの力をもつに足りぬからである。もちろん、私鑄が違法でなく、私鑄貨が贋造貨でない場合もある。しかし、その場合は、國家が通貨の發行を私人に委託するか、免許する場合であつて、そこでは、政府の監督の眼がひかつてをり、發行者も重大な責任を負はされてをり、結局、國家自身通貨を發行する場合と實質的にはあまりちがいはないわけで、インフレーションをひきおこすことからはかえつて緣が遠いといつてよかろう。そして、中國においても、この後の場合の私鑄が見られぬわけではない。たとえば、前漢において、吳王・鼻や、大夫・鄧通が山に卽いて貨を鑄たがごとき、[2] また、くだつては、隋の高祖が、「晉王・廣の楊州に五爐を立てて錢を鑄るをゆるし」、「漢王・諒の并州に五爐を立てて錢を鑄るをゆる」せるがごとき、[3] また、唐の高祖が秦王・齊王に三爐を、右僕射・裴寂に一爐をたまい、もつて錢を鑄るをゆるせるがごときが、[4] それである。そして、これ

らの場合には、べつに、それがインフレーションをひきおこすにいたつたという記述は見ないようである。もつとも、吳王・鼻や大夫・鄧通の場合については、「漢志」に「このとき、吳は諸侯をもつて、山に卽いて錢を鑄る、富、天子にひとし、後ついに叛逆す、鄧通は大夫なり、鑄錢をもつて、財、王者にすぐ、故に吳・鄧の錢天下に布く」とあり、これによつてこれをみれば、彼等が多額の錢を鑄造したことはうかがえる。しかしながら、それがインフレーションをひきおこすまでにいたつたことはいはれてをらない。もちろん、そうでない場合もないわけではない。それにしても、かかる私鑄そのものが元來例外的な現象である。(後述の史實參照)

だが、ここで問題とする私鑄は、むしろ、まえの場合の方である。すなわち、違法行爲であり、贋造貨幣の場合である。ところが、この私鑄が、中國においては、いつの代にも見られる、普通の現象に屬している。明の丘濬は中國の貨幣史を論じて、「錢の弊、僞にあり、」[5]と喝破しているが、まことに至言と思う。それほどこの意味の私鑄は中國貨幣史上においては普通の現象である。したがつて、中國における貨幣史上の問題を理解するためにはこの意味の私鑄を理解せねばならぬといつても、けつしていいすぎにならぬであろう。それはともかく、中國貨幣史上にはこの私鑄がさかんに行はれるを見る。いかにそれがさかんに行われるかは、もと中國においては、貨幣の發行權は君主のもつぱらとすべきところであるとの論が、はやくよりとなえられ、また、制度においても確立せられているところであるにもかかはらず、いつも、私鑄があとをたたず、その根絶がほとんど不可能で、それ故に、むしろ、私鑄禁止の令をのぞくにいたつた例さえあるにより[6]ても、これをうかがうことができよう。しかも、その私鑄貨が流通するのである。そこで、通貨の數量ははなはだ大きなものとなる。それがいかに大きなものであるかは、さきにもふれたるがごとく、中國史上においては、元來、錢荒なる現象がめづらしくなく、したがつて、これ

が救濟のために、いろいろな策が考究せられるわけであるが、その一として私鑄容認策が提議され、實行されるを見ることさえある(7)ことによつてもこれを知ることができよう。かく、私鑄がさかんに行われ、質貨が流通し、その結果、貨幣の流通量がきわめて大となるとすれば、そこに通貨の流通量がはなはだしく増大して財貨の存在量との均衡が破綻し、その結果、貨幣價値が低落し、物價が騰貴し、いうところのインフレーションなる現象が出現するにいたることがあるとしても、それはかならずしも奇怪なる現象ではないことを知らねばならぬこととなろう。

いま、これを、史實について見れば、たとえば、「史記」の「平準書」に、有司が「郡國多くは姦して錢を鑄、錢多くして輕し」と見え、「宋書」の「顏竣傳」にも、「景和元年、沈慶之、私鑄を啓通し、これより、錢貨亂敗し、一千錢、長さ三寸にみたず、大小これにかなう、これを鵞眼錢という、これよりおとるもの、これを綆環錢という、水に入りて沈まず、手にしたがつて破碎す、市井また數をはからず、十万錢、一掬にみたず、斗米、一万、商貨行はれず」とあり、「魏書」の「食貨志」には、「自後行うところの錢、民、多く私鑄し、稍、小薄に就き、價用いよいよ賤し、建義の初、盜鑄の禁を重くし、糾賞の格を開く、」とあり、「隋書」「食貨志」には、梁の世、「ことごとく銅錢をやめ、あらためて鐵錢を鑄」たところ、「鐵賤くして得やすきをもつて、ならびにみな私鑄し、大同已後におよんでは、所在の鐵錢つひに丘山のごとく、物價騰貴し、交易は車をもつて錢をのせ、また數を計らず、ただ貫を論ずるのみ」と記し、また隋においても、「大業已後、王綱弛紊し、巨姦大猾、ついに多く私鑄し、錢うたた薄惡、はじめ千ごとになお重さ二斤なりしも、後ようやく輕く、一斤にいたり、あるいは鐵鍱を剪り、皮を裁ち、紙を糊し、もつて錢となし、相雜えてこれを用い、貨賤しく物貴く、もつて亡ぶにいたる」とあり、「宋

史・食貨志」にも、「民間盜鑄するもの多く、錢文大に亂れ、物價翔踴し」とあり、「金史・食貨志」には、銅錢でなくて銀貨ではあるがつぎの記述を見る。「承安寶貨を私鑄するもの、多くは雜ふるに銅錫をもつてし、ようやく行うことあたはず、京師、肆を閉づ」とあるを見ることができる。同樣な記述はさらに「明史・食貨志」においても、「清史稿・食貨志」においても、また、見出すにくるしまぬところであるが、あまりにわづらはしければ、いま、一々あげず、以上の例により、私鑄を媒介として錢においてインフレーションの生起する事情は、ほぼこれを理解することができるであろう。

しかしながら、以上の例における、貨幣價値の下落、物價の騰貴は、かならずしも、通貨の數量の增大の結果ではなくして、むしろ、貨幣の素質の劣惡化の結果ではないかという疑問がおこりうるであろう。なるほど、通貨の數量が增大していることはあきらかにみとめられる。だが、品質の劣惡化せることも同樣にあきらかにみとめざるを得ない。そうすれば、貨幣價値の下落の因をただちにその數量に歸するわけにはいかぬことにならねばならぬ。いはんや、上例においては、品質の劣惡化が貨幣價値の下落の因であると解することの方が、むしろ、自然であり、すなほであるようにすら感ぜられるにおいて、なほさらである。しかも、ひるがえつておもうに、貨幣は、もと、交換の媒介者、流通の手段である。もし、これが不足をつげるときは、いはゆるデフレーションにおちいり、通貨價値は騰貴し、物價は下落するはずであろう。そして、そのことは、貨幣の素材價値がほとんどネグリシブルな不換紙幣の場合においてもなほかつそうでなければならぬはずである。そうだとすれば、たとえ私鑄貨とはいえ、それが流通し、その流通により通貨の數量が增大せることがあきらかにみとめられる以上、そのことが貨幣價値の下

落に影響をおよぼさぬとどうしていえようか。さらに、もし、通貨の數量が増大しているのでなければ、物價がそのように騰貴し得るはずがなく、かりにそのように物價が騰貴するとすれば、流通手段たる貨幣の不足をきたし流通の杜絶をさへ結果せぬとはかぎらぬことになるであろう。もちろん、上例の史實には流通の杜絶を結果せるをおもはしむるものがしばしばみられる。しかし、インフレーションが極端に達すれば流通が混亂におちいるのはむしろ普通のことであること、いうまでもないところであろう。また、こうもいえよう。すなわち、インフレーションにおいては、通貨の數量が増大し、その結果、貨幣價値が下落し、物價が騰貴する、しかし、それはかならずしも人が通貨の數量の増大を意識するが故に生ずるとはいえぬであろう、さすれば、いま上例の場合、貨幣價値の下落、物價の騰貴において人が錢貨の低下に眩惑せられて通貨の數量の増大をネグレクトしているとしても、その故に、通貨の數量の増大が貨幣價値下落、物價騰貴の因であり、そこにインフレーションを見ることが否定せられねばならぬ理由はあり得ないであろう、と。いわんや、「錢多くして輕し」とか、「鐵錢つひに丘山のごとく、物價騰貴し云々」とかいうふうに、通貨數量の増大が貨幣價値の下落、物價騰貴の因であることをもかならずしもみとめざるにあらざるものあるにおいてなおさらしかりであるといえよう。それにしても、私鑄を通じてあらわれる錢のインフレーションにおいては、それが錢質の劣惡化によりて拍車づけられるということはこれをみとめてよい、いな、みとめなければならないことは、いうまでもないところとせねばならぬ。

つぎに、われわれは、錢におけるインフレーションが大錢を媒介としてなりたつを見ることができよう。中國に

おいて大錢なるものは、これ、また、けつして、めづらしいものではない。むしろ普通のものである。げんに、錢という字が史上はじめて見えるのは「國語」においてであるといわれるが、それは周の景王が大錢を鑄たという記事である。もとより、この記事が史實としてはたして眞なりや否やは疑問とせられるところである。いな、今日においてはむしろ否定せられるに近いようでさえある。[8] かりに、これが事實であるとしても、それは、「錢の輕きをうれえて、まさにあらためて大錢を鑄んとす」るものであり、錢價下落の救濟策にほかならぬはずであるから、およそ、インフレーションを媒介することとは對蹠的のものでなければならない。ここにいう大錢は――そして、それこそ、まさに、中國において大錢という場合普通のものであり、さきに、中國において大錢なるものは、けつしてめづらしいものではないといつたところのものであるが――一箇にて小錢二箇以上の價値を與えられたる錢である。そして、それには、たとえば、明の太祖が鑄た洪武通寶において、大小五等の式により「當十錢、重一兩、餘は遞降し、重一錢にいたりて止む」とあるがごとく、大錢小錢の素材價値がその名目價値に比例するものもあるが、かくのごときは、むしろ、まれであつて、大錢小錢ならび行はれる場合には、その素材價値の比はその名目價値のそれと比例せず、大錢はその比例をこえてはるかに高い名目價値を享有するが普通である。たとえば、宋代にあつて、「小銅錢三にして當十大銅錢一を鑄るべし」（「宋史・食貨志」）とあるがごときが、すなわち、それである。かかる大錢の鑄造はやがて通貨流通量を增大せしむる所以であり、錢荒救濟策の一でもありうるが、同時に、それ故に、また、それは、インフレーションをひきおこす所以でもありうるものでなければならぬであろう。

いま、これを史實に徵して見れば「晉書・食貨志」に、「孫權、嘉平五年、大錢一、五百に當たるを鑄、赤烏元

年、また、千錢に當たるを鑄る、故に呂蒙荊州を定め、孫權、錢、一億をたまふ、錢すでに貴く、ただ空名あるのみ、人間これをうれふ」とあり、「舊唐書・食貨志」をみると、「乾封元年、封嶽の後に至り、また、新錢をあらためつくる、文に曰く、乾封泉寶、徑一寸重二銖六分、すなわち、舊錢とならび行う、新錢一文を舊錢の十に當つ、周年の後、舊錢ならびに廢す、（中略）また、改鑄により、商賈通ぜず、米帛價を增す、」とあり、また、「御史中丞、第五琦奏請す、錢をあらため、一をもつて、十に當たるの錢を鑄るをゆるし、文を乾元重寶と曰ふべし、（中略）また、さらに、重輪乾元錢を鑄、一を、五十に當て、二十斤にして、貫をなさんことを請ふ、詔してこれを可とす、ここにおいて、新錢・乾元・開元通寶錢、三品、ならびに行う、ついで、穀價騰貴し、米、斗、七千にいたり、餓死するもの、道に相枕す」とあり、また、「宋史・食貨志」に、「大約、小銅錢三、當十大銅錢一を鑄るべし、故に民間盜鑄する者多し、錢文大に亂れ、物價翔踴す、公私これを患ふ」とある。明、清時代に入つても大錢はやはりというよりも、むしろ、ますます行はれ、當百・當千等さえあらわれ、貨幣價値の變動をひきおこすにいたつているを見ることができる。

かくのごとく、われわれは大錢を媒介として錢においてインフレーションのなりたつを見る。しかし、この場合注意せねばならぬことがある。それは、この大錢においてなりたつインフレーションにおいて私鑄が、やはり、大きなはたらきをしていることが見られるということである。すくなくとも、それは私鑄によつて促進せしめられるというべきであることである。おもうに、大錢は、たとえば、「小銅錢三にして當十大銅錢一を鑄る」がごときもので、素材價値をはるかにこえたる名目價値をもつものである。それだけに、それは、私鑄の好對象でなければなら

ぬ。さらでだに私鑄のさかんなるところにおいてこれが私鑄のさかんなるべきは推測にかたからぬところといいえよう。そしてそのかぎり、また、大錢においてなりたつインフレーションは、ひとり、錢の數量の增加のみならず、錢の品質の下落に起因するところあること、看過するをゆるさぬものがあることをわすれてはならない。そして、錢質の下落といえば、大錢は、それ自體錢質の下落にほかならないのであるから、たとえ、私鑄を通じなくとも、また、數量の增加を考慮に入れなくとも、なお、貨幣價値の下落の可能性をみとめなければならないとも考えられる。すなわち、名目價値の實質價値えの接近とでもいうべき事象においてなりたつ大錢價値の下落である。宋代の當十大錢が、結局、當三錢になつているがごときはこの理を說明してあまりあるものといえよう。そしてそれが單にそれだけにとどまるならば、大錢の價値の低落にすぎず、一般に錢價が低落し、物價が騰貴することにはかならずしもならないであろう。それはしかしながら、大錢が通貨の數量を增大せしむることによりて貨幣價値の下落、物價の騰貴を誘引することもまたいなむべからざることは、かならずしも多言を要しないところであろう。そしてそのかぎり、われわれは、大錢においてインフレーションがなりたつのを見ることができるであろう。

なお、大錢それ自體における素材價値の低下は、これを、兌換券における部分的な兌換の停止に擬することができるのではあるまいか。そしてそれができるならば、われわれは、大錢におけるインフレーションにおいて、部分的な不換紙幣におけるインフレーションの理を見ることもできるのではないかと思うが、いかがなものであろうか。

ちなみに、今日、インフレーションの下においては巨額の名目價値をあたえられたる貨幣が出現することがめづらしくない。前大戰後のインフレーション時代、ドイツにおいては、それまで中央銀行の銀行券一枚の金額は一千

マルクを限度としいたが、それが、一万マルク、十万マルク、百万マルクとなり、一九二三年十一月には遂に一兆マルク、二兆マルク、三兆マルクに飛躍した。今次大戰後のインフレーション下のハンガリーでは十兆兆ペンゴ札が出現した。わが國でも以前は百圓札は日常生活にはあまり緣がなかつたといつてよいと思うが、今日のインフレーションの下ではかつての十圓札ほどに――あるいはそれ以上に――流通している。千圓札の發行すら要望の聲をきくくらいである。これら大紙幣は大錢と共通するものをもつといいえようかと思う。しかし、これらの大紙幣はインフレーションの結果としてあらわれる產物であり、大錢はインフレーションをひきおこす因子である點においてはまつたく對蹠的であることはみおとすべからざるところといはねばならぬであろう。ただし、そうはいうものの、インフレーションの進行過程においては、因が果となり果が因となる。通貨の數量が增大するから通價の價値が下落し、通貨の價値が下落すればまた通貨の數量が增大せざるを得ぬことになり、はてしなく循環するところにインフレーションは進む。したがつて、大紙幣はインフレーションの結果であり、大錢はインフレーションの原因であるといつてみても、インフレ行進曲の奏吹裡におどるこの二者のこの區別はかならずしもなしうべからざる場合もありうるとせねばならないであろう。

さきに述べたるごとく、錢は方孔圓形のあなあき錢であつて、普通このあなに糸をとおして用いられる。これを貫という。あるいは緡ともいう。一貫は普通千文よりなり、百文ごとにふしでくぎりがつけられる。しかるに、この場合、百文に足らざるものをもつて百とすることが行はれたものである。これを「省陌」または「墊陌」等とよ

び、これに對して百文が缺けてをらぬものを「足陌」とか「足錢」とかよぶ。あるいは、また、「省陌」は貫の長さが短いからこれを「短錢」といい、これに對して「足陌」を「長錢」ということもある。もつとも長短は相對的な概念であるからひとしく「省陌」の中でも長短の區別が生じうる。たとえば九十をもつて百とする「省陌」を八十をもつて百とする省陌に對して長錢とよぶがごとくである。ところで、「省陌」は百に足りない錢をもつて百とするのであるから、それは三錢をもつて十錢にあたらしむると同じ理でなければならぬ。したがつて、「省陌」は大錢と、すくなくとも、通貨の流通量に對する關係においては同樣の事情にあると見ることができる。しかるに、大錢は、上述のごとく、その媒介において錢についてインフレーションをなりたたしむる。しからば省陌もまたその媒介において錢についてインフレーションをなりたたしめることが推定せられるところでなければならぬといえよう。しかし、史實に徵すると、省陌の記述は、古くよりはじまり、枚擧にいとまのないほど見られること私鑄や大錢と同樣であるが、(9) いま、それらの記述を見るに、それがインフレーションを形成せしむるにいたつたということを認承せしむるに足るものを見かけない。普通、正史の上ではじめてあらはれるとせられるのは、さきに引いた、「隋書・食貨志」に見ゆる、梁の代「所在の鐵錢丘山のごとく、物價騰貴し、交易は車をもつて錢を載せ、また數を計らず」とあるにひきつづいて、「商旅姦詐し、これによりて利を求め、破嶺より以東、八十をもつて百となし、名づけて東錢といい、江・郢以上七十を百となし、名づけて西錢といい、京師九十をもつて百となし、名づけて長錢という、中大同元年、天子すなわち詔して足陌を通用せしむ、詔降りて、人從はず、錢陌ますますすくなし、末年にいたり、ついに三十五をもつて百となすという」とある記述であるが、そしてこれが、まず、省陌とインフレーションとの關係が、もつとも深い記述といつてよかろうと思うところのものであるが、これにおいても、

省陌は、むしろインフレーションの結果であつて、その原因ではないといわねばならない。しかし、史實の記述に徵證するに足るべきものがないといつても、それが大錢と理を同うし、そして、大錢がインフレーションの媒劑であることをみとむるかぎり、それがまた、インフレーションの媒劑たることを一概に拒否するのはいかがなものであろうか。いはんや、史實の記述に徵證するに足るべきものを見ぬといつても、それはもと、淺學寡聞の私のせまい涉獵の範圍内でのことにすぎぬのである。案外徵證するに足る記述がでて來まいものでもないと思われるにおいて、なおさらである。

さらに、省陌がインフレーションの媒劑となるというとき、その中にふくまれる箇々の錢に私鑄貨があることは別とするも、その省陌の數を勝手に變更することにおいて、私鑄と同一の理を見ることも、見おとしてはならないであろう。

三

錢においてなりたつインフレーションにあつては、通貨價値の下落・物價の騰貴は通貨の數量の增大によるとしても、なお、通貨の品質の劣悪化によるところあるをみとめねばならない。二者の區別は理念の上では容易であるが、現象の上では困難である。それだけに現象において見るときは、錢においてあらはれるインフレーションはインフレーションとしては純粹なものとはいえない。そして、それは、結局は、錢が素材價値をもつことに歸せられるであろう。ところが、紙幣は素材價値をもたない。すくなくとも、ネグリシブルである。だから、紙幣においては、純粹なインフレーションがなりたちうると考えられる。ただし、兌換券は別である。兌換券も、紙幣であるが

ぎり、それ自體の素材價値はネグリシブルである。しかし、それは一定の鑄貨の表象である。故にそれはその鑄貨の素材價値を反映する。そのかぎりにおいて、それはその鑄貨となんらえらぶところはない。その素材價値がネグリシブルになるのは、兌換が不能または停止となつて、不換紙幣と化する場合である。ところが、中國の紙幣は、もと、兌換券である。それが、濫發の結果不換紙幣と化するが常である。明の丘濬が、「鈔（紙幣）の弊、多にあり」[10]といつたのも、もつともである。そこで、われわれは中國の紙幣においては絶えず純粹にちかいインフレトシヨンを見ることとなる。故に、いま、これを史實に徴せんとすれば、應接にいとまあらず、枚擧の煩に堪えない。だから、ここには、しばらく、その代表的なもの若干を引くにとどめる。

中國の紙幣は宋の交紙にはじまるといはれるが、その交子について、すでに、「宋史・食貨志」は、「交子、給多くして、錢足らず、價はなはだ賤きをいたす、すでにして實錢なし、法、行うべからず」としるしている。「金史・食貨志」を見ると、河東宣撫使・胥鼎が上言して、「今十貫例のもの、民間はなはだ多し、もつて歸するところなし、故に、市易多く見錢を用い、鈔、每貫わづかに直一錢、かつて工墨の費に及ばず」といい、平章・高琪の奏に、「軍興りて以來、用度賈らず、ただ寶券に賴る、然れども、入るところ、出づるところを敷かず、ここをもつて、浸く輕く、今、千錢の券、僅に、直、數錢、隨つて造れば隨つて盡き、工物、日に增し、もつてこれを救う有らず、弊ますますはなはだしからん」とあるを見る。なお、「新元史・食貨志」には、耶律楚材が紙幣の濫發をいましめて、「金の章宗のとき、はじめ交鈔を行い、錢と通行せしむ、有司、鈔を出すを利となし、鈔を收むるを諱となし、これを老鈔という、萬貫をもつてしてただ一餅に易ふるのみにいたる、民力困竭し、國用匱乏す、まさ

に監戒となすべし云々」といえるを引く、「元史・食貨志」にも、「行鈔を印造し、民間に通用せしむ、これを行うこといまだ久しからずして、物價騰踴し、價十倍を逾ゆ、また、海内の大亂に値い、軍儲供給賞賜犒勞、毎日印造し、數計すべからず、舟車裝運、軸艫相接し、交料の入間に散滿するもの、これ無きところなく、昏軟せるものは復行用すべからず、京師、料鈔十錠、斗粟に易ふる、得べからず、すでにして、所在郡縣、みな物貨をもつて相貿易し、公私積むところの鈔、ついにともに行われず、人のこれを見ること弊楮のごとく、國用これによりてついにとぼし」とあり、「明史・食貨志」には、「大明寶鈔をして歷代の錢と兼ね行はしむ、……時に江西閩廣、民、錢を重んじ鈔を輕んず、錢百六十文をもつて鈔一貫に折するものあり、これによりて、物價翔貴し、錢法ますます壞れて行はれず、」とあり、また、都御史・陳瑛の言として「比歲、鈔法通ぜず、みな朝廷鈔を出すことはなはだ多く、收斂法なく、もつて物重く、鈔輕きによる、」とある

これによつて、紙幣においてなりたつインフレーションが、その濫發の結果、その價値が下落し、物價騰貴し、やがて破局に進むことにおいてあらはれるのがあきらかに看取できよう。ただし、その際、貨幣價値の下落は兌換不能におちいるのが原因であることをみとめねばならないようである。しかるに兌換中止は紙幣の質的變化であり、量的變化ではない、といわねばならないであろう。そして、それはそうである。そのとおりである。いなむべくもないところである。しかしながら、兌換の不能は濫發の結果である。そこで、やはり紙幣價値の下落の因を數量の增大においてみとめてよいといえることにはならないものであろうか。それに、かりに兌換が停止されても、もし數量さえ適當であればかならずしも價値の下落をきたすものでないことは不換紙幣制度の存在がこれを證す

る。こういうと過去の中國において不換紙幣が制度として、はたして、なりたちうるものであるかどうかが問題となるでもあろう。しかし、流通經濟の下においては流通手段たる貨幣を必要とすることは疑問の餘地のないところで、すでに、流通手段たる貨幣が不可缺であるとすれば、それが單なる紙片にすぎなくてもかまわぬはずであり、そして、そのことは中國のみを例外とせねばならぬ理はないであろう。それは、南北朝時代、すでに、東晉の孔琳之が、「聖王無用の貨を制して、もつて有用の財を通ず、（中略）穀帛は寶となし、もと衣食に充つ、分かちてもつて貨となせば損を致すことはなはだ多く、また商販の手に勞毀し、割裁の用に耗棄す、これが弊たるや曩よりもいちじるし」（晉書・食貨志）と論じているによりても知られよう。けだし、それは、通貨の素材として有用の財を充てるは不經濟である、よろしく無用の財をもつてこれに充てよというものである。だから、これをさらに徹底すれば不換紙幣制度の肯定論となるべき理である。そして、元朝においては鈔を發行しながらその表示する錢はこれを發行するにいたらなかつた例もある。(11) すくなくとも、さきに私鑄のところで述べたように、貨幣の品質がその價値の下落の因をなすことをみとめるとしても、なお、その數量の增大がその價値の下落の因であることをみとめることはゆるされ得よう。さらに、インフレーションをその進行形においてながめれば、兌換不能の結果紙幣の價値が下落すれば、當然の結果として、より多くの紙幣を增發すべき必要にせまられねばならず、そして、その結果、その貨幣價値はさらに下落し、かかる循環の結果、ついに破局にいたるわけであるが、いまかかる兌換停止後の紙幣增發によるその貨幣價値の下落は品質の劣惡化に因るのではなくて、數量の增大に因るものであることはいうまでもないところとせねばならぬであろう。

つぎに、紙幣におけるインフレーションにおいては、さきの錢におけるそれの場合とおもむきをことにし、その數量の增大が私幣に因るという現象が見られない。すくなくとも右の例にはあらわれてをらない。これはただ右の例にあらわれていないのみではなくて、ほとんど見られぬところといつてもよい。それでは紙幣においては私幣はおこらぬのかといえば、そんなものではない。いうまでもなく、私幣のおこる原因としてまず第一にあげらるべきものは利を得るということであろう。しかるに、私幣はその金額が大であり、その素材は安價である。利を得るといえばこれほどあつらえむきのものはあるまい。まるで、濡れ手で粟のつかみ取りみたいなものである。だから錢において私幣がおこるぐらいなら、紙幣においてこそ私幣がおこらねばならぬと考えられる。げんに、歷代、これに對する對策にすこぶる苦心せる跡がうかがえる。これに對する制裁は常に嚴格をきわめ、紙幣の表面にさえそれをあらわしているくらいである。また、實際にもその事例はある。そして、それは、けつして、めずらしくはない。たとえば、宋の淳祐三年臣僚が奏して、「いま、官印の數、損すといえども、しかも僞造の券いよいよ增す、しばらく、十五・十六界の會子をもつていはば、その入るところの數、よろしく出づるところの數より減ずべし、いま收換の際、元額すでに溢れて、來たるものいまだ止まず、もし僞造するにあらずんば、それ何ぞよく多きをいたすことかくのごとくならん」（宋史・食貨志）といつている。それほどであるのに、右の例にもみるごとく、紙幣におけるインフレーションにおける因としてこの私鈔が指摘せられていない。それは一體どうしたことなのであろうか。清朝時代における紙幣論者である王鎏等にいわせると、紙幣は錢などとちがつて詳細な印刷であるから僞造が困難であるとか、紙幣は金額が大で各人が注意するからごまかしが利きにくいとかいうことになるようであるが、[12]どうもそれだけではなつとくしかねるのはひとり私のみではあるまい。それではそれは何故であろうか。それにつ

いて、こうは考えられぬであろうか。すなわち、錢はすでに述べたごとく不足になやみがちであつた。そこで、私幣はその不足を充足する役割をはたすことになる。そこで、それが流通する。それに素材價値がある。もちろん、利のためにする私幣であるから品質は惡い。しかし、ともかく素材價値はある。品質が惡いからやがてその價値は低落するが、それでもなお惡かろう安かろうで低い價値で流通しよう。とにかく、かくて、それは流通する。ところが、紙幣は素材價値をもたない。紙幣としてよりのほかには使いようがない。しかるに、これはその素材は豐富である。だから政府はいくらでも發行できる。不足どころか、いつも過剰に發行してインフレーションにおちいるを常とすること上述のごとくである。過剰はあつても不足はない。これでは私幣の流通する餘地はないといわねばならない。いくら利が得られるといつても、それは流通を前提としてのことである。流通の餘地がなければ利のあげようはあるまい。かくて、最初に述べたごとく、それは例外的な存在でしかなくなる。とてもインフレーションを引きおこす因子にあげられるほどにはなり得ないことになる。私はこう考えるのであるが、はたしてどんなものであらうか。さらに、かりに、私鈔が少々その數を增したとしても、政府の濫發の前にはほとんど問題にならず、あだかも太陽の前の星のごとくその影がうすいこともまた指摘するに足りようか。

四

以上、私は中國史上におけるイシフレーションについて若干の考察をこころみるところあつた。それにおいて、私は中國史上においてインフレーションは錢においても紙幣においてもあらわれていることを見た。そして、錢においてあらわれるインフレーションは、私鑄、大錢を媒劑とすること大であり、また省陌も大錢と同樣の作用をな

すと考えられることをあきらかにするとともに、大錢においてもなお私鑄が大きな作用をなしてをり、省陌においては私鑄と性格をひとしくするところの作用が存することを知つた。要するに、錢においてあらわれるインフレーションにおいては私鑄という因子がきわめて大であり、そしてそこにそのインフレーションの特異性が見られることになるであろう。そしてこの特異性は單に通貨の數量を增加せしむるということ以外、その品質の低下ということによつて貨幣價値の低下、物價の騰貴に拍車をかけるという重大な意味をともなうことに留意せしむるものである。ところが、紙幣においてあらわれるインフレーションは、これとおもむきをことにし、ほとんど、政府の濫發によりておこり、その發生、發展の過程は大體、今日のインフレーションとカテゴリーをひとしくするを見る。それではそれには、べつに特異性と見るべきものはないかといへば、私はかならずしもそうもいへぬのではないかと思ふ。けだし、紙幣にインフレーションがつきものであるといふ觀を呈してゐること、いひかへれば、それが例外的な現象といふよりも、むしろ、原則的な現象といふべきに似るものあることは、その特異性としてあげるに足り、またあげねばならぬと思はれるからである。いかに、それが、そうあるかは、清朝時代に入つてさへ、その初期においては、なほ、その弊をおそれるのあまり、紙幣の發行を忌避する傾向があり、それを建言した者を、「妄言政を亂す者」として戒めてゐるによつても、これをうかがひえよう。(13)

そしてこう見てくるとき、明の丘濬の「錢の弊、僞にあり、鈔の弊、多にあり」の句をいまさらながら、至言と感ぜざるを得ぬ。

なほ、こゝで、インフレーション對策がいかに行はれてきたかについても考察すべきであるが、それについて

は、以前に書いたもの〻中ですでにふれたことがあるので、それにゆづることにする。(14)

——一九四九・八・一——

(1) 「比年。公私上下。並苦乏錢。而百貨不通。人情窘迫。謂之錢荒。」(「宋史、食貨志」)
(2) 史記・平準書、漢書・食貨志。
(3) 隋書・食貨志。
(4) 舊唐書・食貨志。
(5) 丘濬、「大學衍義補」、卷二十七。
(6) 加藤繁博士「西漢前期の貨幣特に四銖錢に就いて」(「山下先生還曆記念東洋史論文集」所收)
(7) 拙著、「支那貨幣考」一一九—一二一頁、參照。
(8) 加藤繁博士「周景王鑄錢說話批判」(「史學」第十一卷、第二號)
(9) 拙著、「支那貨幣考」一八二—一八五頁參照。
(10) (5)を見よ。
(11) 「元之交鈔寶鈔。雖皆以錢爲文。而錢則弗之鑄也。」(「元史・食貨志」)
(12) 玉遵「錢幣芻言」、拙稿「玉遵の紙幣論」(經濟論叢第五九卷、第二・三號)參照。
(13) 劉錦藻。「皇朝續文獻通考」卷二十五
(14) 拙著、「支那貨幣考」一七一—一七二頁、一〇八—一二〇頁、一九一—一九六頁參照。